

て歩くんだ。それかといつて鳥の様にも今では

飛べるし、我々の分らない言葉も知つてゐるよ
それあ、人間ほど伶俐なもの世の中におない
な、今に君等を征伐に来るかも知れないぞ」

「生意氣な事をよせ、脚の二本しかないものが脚
の四本ある我々よりも何でも出来、何でも知つ
てゐるつて法があるものか」

「人間が飛ぶつて、すぐ落ちるにきまつてゐる、
私等この羽は小さくても落ちたためしはない」
「我々を征伐に来るつて？ 我々のこの手に、こ
の牙にまざる武器が何處にある？」

「大體、君はいつも生意氣だ、今度は我慢が出来
ぬ、さあ、皆さん、梟の奴を退ひ出さうぢやあ
りませんか」

との熊さんの言葉にみんな一同にドットせめかけ
ました。

「これは危い」

とみた梟

「何といつたつて靴は靴ですよ、ハアハア！」
とみなを見下ろしながら暗い空を飛んで行きまし
た。終（外國讀本より）

駒馬の胸の赤くなつたお話

昔々或寒い北の國に火の番をしてゐる老爺さん
と息子とが居りました。火種が消えたら最後、何
處の家にも火の氣がなくなり一晩の中にみんな凍
え死んでしまふか、それとも白熊の鋭い牙で八つ
ざきにされて死ぬかどちらかでございますから
二人は夜も寝ないで交るく、一生懸命に番をして
ゐましたが、可愛想に老爺さんは風邪が元で重い
病氣にかゝり毎日悪くなつて行くばかりでした。
息子は老爺さんの世話やら火の番やら始めの間は
甲斐々々しくやつてゐましたが段々疲が出て来て
眠くて堪らなくなりとうとう火の事も忘れて眠つ

てしまひました。

今か／＼と息子の眠るのを待つてゐた白熊は息子が眠つてしまふと家の中へ躍り込んで今にも消えさうな火種をバラ／＼にかき散らしその上にビシヨ濡れの體をころがして、もうすつかり灰になつてしまつたと思ふ時分白熊は「これから自分の世界だ」といはんばかりに尾をふり／＼喜んで穴に歸つて行きましました。

丁度その時何處からか飛んで來た一羽の灰色の駒鳥が窓からのぞいて白熊のする事を見て居りましたが白熊が歸つてしまふとすぐに爐端へかけ寄りすばしこい眼玉で中を探しますとやつとホタル火の様な火種が灰の中から光つてゐるのが見つかりました。どうかして火を起したいものだと駒鳥は炭の上につてフウ／＼息もつかずにふきながら可愛い／＼小さな羽でバタ／＼あふぎました。炭も灰も、すつかり白熊の體でぬれてゐますので、

なか／＼つきません。時々消えさうになります。

駒鳥は灰だらけになつて尙も一生懸命にあふぎますと段々火が大きくなり自分の乗つてゐる炭にも火がついて胸も焼け相になりましたがそれでも駒鳥はやめません。尙々懸命にあふぎたてました、すると眞赤な火花がドットあがり、火は立派に起りましたので安心して駒鳥はスーッと何處かへ飛んで行つてしまひました。不思議な事にその駒鳥の止まつた所には何處でも火が起つて何處の家でも火の消える様な事がなくなりました。冬になつて白熊がやつて來る時が近づいて來ても北の國の人達は安心して夜休む事が出来る様になりました。今でも北の國では冬になると何處の家でも温い爐を圍んでお老爺さんは長い髭をなでながら駒鳥の胸はどうして赤いかつて子供等にくり返へし／＼お話をして駒鳥の恩を忘れないといふ事です。

(外國讀本より)